
神様になれ!!

バスカビル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様になれ！！

【Nコード】

N7555J

【作者名】

バスカビル

【あらすじ】

日常からいっぺんしてハラハラドキドキの戦闘ライフ。

これは次代の神に任命されてしまった少年が様々な世界を旅していくおはなしです。

今のところネギまのみ。

チートな描写がかなりあります。

まあでも神だからしかたないよね

神になる

いつもと変わらない朝、
いつもと変わらない学校、

そんな日々がいつまでも続いていくと思っていた。

学校の帰り道、工事中のビルの横を通った。

「いったいどれだけ高いビルになるんだろうか、そうおもって見上げているとガッツとおとがした。」

最後にみたのは腹のところ。二つにわかれた自分の体だった。

「おい、おい」声が聞こえる。

(ん?なんだ:?)

「おい！おきろー！」 耳元で大きな声が聞こえた。

「うわ！なんだ？」
「いったい何事だろう。」

「ふー、やっと起きたか。」えっ、なんですかこの状況。

周りには草花が咲き乱れ、鳥がさえずり、動物達が愛を語らっている。そして目の前には超絶美形……。

「えーと、どなたでしょうか？」

「神だ！！」
「……は？」

「それでな、君は死んでしまったのだが、なんと、君は10000000000000000人目の死者なのだ。人がきりのいいかずで死んだ場合、その人間は神になるときまっているのだ。おめでとう今日から君は神様だ。」な、なんだつてー。

「え……は……な……」
頭がぐるぐるする。

そんな僕にお構いなしに自称神は話続ける。

「いやー君は運がいい。君は神は神でもそんじよそこの神ではない。最高神である私は今をもって隠居する。君が今日から最高神だ！」

「& a m p ; @ * / (# \$! ! ! 」 頭が限界をこえた。

……しばらくたって……

「はぁー、いろいろつつこみたいところはありますが、いったいばくはなにをすればいいのですか？」

「ふむ、まず神に必要な心を養うために様々な世界をまわってもらう。」

「世界？」

「うむ」神がうなずく。「世界は無数にある、その世界をまわり様々な人とふれあうことで神としての心を養ってもらう。」

「なるほど」いつていることはすじが通っているな。

「それではまず>ネギま<の世界にいつてもらう」

「ちよつとまで、なぜにネギま？」

「決まっているだろう、おもしろいからだ。」お、面白いからって……。

「それではいつてこい!!」神の手がピカピカ光だした。「えっ、ちよつとま」

「GO!!」

「うわーーーーー」視界が真っ白になった。

神になる（後書き）

感想お願いします

どんだけー

「……うーん」だんだん視界がはつきりしてくる。

「ここは？」まわりをみまわしていると突然声がした。

> あー、こちら元神、聞こえるかー<

「うわ！なんだなんだ！」

> だから元神だ、今からその説明をしてやる。そこは大戦中のネギまのせかいだ。まあ、どこに行くかとか何をするかとかは君で決めてくれ。それじゃあなくブツツ、ツーツ…

「はあ！説明短すぎる。いったいこれからどうしたら……」グウ
ー

「……ごはんにするか……」そうはいつでも食料を調達しなくてはならない。

「いったいどうすれば……」なやんでいると。

ゴアアアアアアー！！目の前に竜が現れた。
さあ！どうする？

1 戦う…いや、むりだろ……

2 道具…いや、もってないし…

3 入れ替える…いや、仲間いないし

4 逃げる…これだ！！

逃げるを選択した。

逃げられなかった。

ギヤオオオオー！！竜がほえる。

「えーい！ーか八かだー！！」

やぶれかぶれで知っている呪文をと覚えてみる。

「プ、プラクテビギナル？アールデスカット！（火よ灯れ）」

……………結果、竜の丸焼きの出来上がりです。

あは …… (汗)

「や、やばくないか」

ブラクテビギナル？アールデスカットは杖の先にライターの炎ぐらの火を灯す魔法、なのに竜を焼くほどの威力……。

「まあ、ごはんにするか…」

(けっこう美味でした。)

どんだけー（後書き）

ちよつとチートすぎましたかね……（汗）

まあ、神なんて許してください

感想まっています。

神への一歩？

ふー、お腹がふくれたところでこれからどうするか考えなければならぬ。

やはり、ナギやラカン達にもあつておきたい。

そのためにはまず近くの町にいつて情報を集めなければ。

「さあ、いくか！」

……そうはいつでも町の方角がわからない。

こうなつたらと、竜の角を持って上になげてみた、角の先が示した方向へ進もうとかがえたからだ。

「えい」

ヒュゴオーー！！

角は一瞬にしてみえなくなつてしまった。

「……テクトウに歩くか……」

自分の力にあどろきつつ歩いていると遠くに町が見えた。

「ラッキー！さあ、町ヘレッツゴー！！」

町へ急ぎ足で歩いていった。

「……だれもいないな……」

町には活気どころか人一人いなかった。

気配はするから家のなかにはいるようだが出てくる様子はない。

と、そこで近くの家から白髪のおばあさんがとびだしてきた。

「おまえさん、旅人かい？悪いことはいわない、はやくかくれなさい。」

「どうかしたんですか？人も外にいませんし。」

「最近このちかくに凶暴な竜があらわれたのじゃ。はやく隠れないと食われてしまうぞ。」

（えっ、竜つてもしかして……）

「あの、その竜つてこの角のやつですか？」上空からふつてきた角をキャッチしてたずねる。

「そ、そうじゃ。その角はまぎれもなくあの竜のもの………いつたいどうして…?」

「あっ、丸焼きにしちゃいました」

「……はっ!?!」

おばあさんは驚愕の表情から角をみてそれが本当であるとなつとくしたようだ。

「み、皆のものー!!あの竜が死んだぞー!!……!!」

おばあさんとはとてもおもえない大音量でさげんだ。

しばらくするとあちこちのいえのとびらがあきはじめた。

住人達は最初は半信半疑だったが、僕がてにした角をみると目をみひらき、すぐに歓声をあげながら僕めがけておしよせてきた。

「救世主様だー」「勇者さまだー」「神さまだー」

(まあ実際に神だけだね……)

異世界について最初の夜は住人達によるお祝いで過ぎていった。

原作キャラ登場！！

昨日の夜は竜の肉を使った豪勢な料理が振る舞われ、飲めや歌えやのドンチャン騒ぎだった。

最後のほうになるとみな明日からの平和な暮らしに心をおどらせた。「もう作物をあらされることもない」「安心して暮らせる」「あー、ありがたやありがたや」「勇者様万歳！！」

……いつの間にか勇者にされてしまっていた。

住人からお礼にと竜の角で作った杖をわたされた。

上位種の竜だったようなので魔法媒体として最適らしい。

「ありがとうございます。ご馳走までいただいたのに」

「なーに言っているんだい。あんたが来てくれなかったらいまでも竜に怯えてなけりやならなかったんだ。礼をいわなけりやならないのはこっちのほうだよ」

住人達にいまのせかいの様子を聞き、旅立つことにした。

「また、きなよいつでも歓迎するからねー！」

住人達にみおくられ、旅を再開した。

まずはやはり魔法を使えるようにならなくてはならない。

「んー、そのためには誰かの弟子になるのがいいかな。」

どこにいけばいいのかわかるわけもなく、恒例（二回目）の儀式をする。

「よっ！」「ヒュゴオー」

杖が大空にすいこまれていった。

……

……

……

（ちよつと強く投げすぎたかな……）

反省しているとうしろから声がした。

「おい、その小僧。さつさと食い物をだしな。おとなしくしてい

ればなにもしはしない。」

「ケケケ、テイコウスルト、イノチノホシヨウハナイゼ」

そこには金色の髪をした吸血鬼らしきおんなとカタカタうごく殺人にんぎょうがいた。

原作キャラ登場！！（後書き）

誰だかわかるでしょうか？
評価をポチッとくださいな

弟子入り！！

「あつ、あなたは！」

「ふっふっふ、そうさ私は最強の吸血鬼エヴァンジェ「キティちゃん！」

「な、なぜその名をー！」

「ケケケ、カワイラシイゼ。ゴシユジン」

（こんなに早くキティちゃん（エヴァンジェリ）にあえるなんてラッキー。これも竜の角の効果かな。あつそういえばあの杖はどこに
…。）

「ふっふっふ、その名をしられたからには死んでもらブユー！」

「あつ……」

杖がエヴァンジェリンの頭にめりこんだ。

……

……

…

「…んっ、んー」

「あ、目が覚めた？」

「ここは？……ってなにをやっているのだー！！！！」

「なにつて膝枕だけど？」

なにかへんなどこあったかなー。

「い、いやそんなことはどうでもいい。貴様、先程の攻撃はなんだ？このわたしが無様にたおれるとは……」

「あーそれは、かくかくしかじかでー」

「な、なにー！！ただの偶然だと！そんなことではわたしのプライドがグチャグチャだ！えーいわたしとしようぶしろー！！」

「え、じゃあ負けたほうは勝ったほうのゆつことをなんでも一つきくことにしよう」

「ふっ、いいだろう」

こうして、エヴァとの勝負がきまった。

……

……

…

勝負開始！

「さあ、坊やどこからでもかかってくるがいい！」エヴァのほうは
よゆうの表情です。対して……

（や、やばい勢いであんなこといつちゃったけど僕呪文あれ（アー
ラデスカット）しかしらないし……）

「そっちがこないならこっちからいくぞ！！」

おっと、エヴァからしかけたぞ。

「ケケケ、シニヤガレ」チャチャゼロも殺る気まんまだー！！
それにくらべて……

「や、やばいよー……」……

「ふっ、くらうがいい」おっとエヴァがえいしょうをはじめたー！！
「リク？ラク？ラ？ラック？ライラック

セプテンデキム？スピリトウス？グラキアーレス？コエウンテース
？イニミクム？コンキダント

（氷の精霊１７頭、集い来たりて敵を切り裂け）

サギタマギカ？セリエス？グラキアーリス

（魔法の射手、連弾？氷の１７柱）！！」

ズガガガガー

（絶体絶命だー）

> あーあー、聞こえるかー、こちら元神く

「きこえますとも、どうにかしてくださいー」

> ふっ、いいだろう。ではこうさけべ！

気合い防御ー！！く

「えっ、えー！！！」

> ほら、やられるぞーく

（し、しかたない）

「気合い防御ー！！！」
ボキユウー

……

…

煙りがはれていく、

「なっ、無傷だとー！」

かすりきず一つついていない。

（た、たすかったー）

内心ヒヤヒヤである。

「フっ、おもしろいやつだな。いいだろう今回は私のまけでいいのぞみをいうがいい」

「えっ、それじゃ弟子にしてください」

エヴァは一瞬キョトンとした顔をしたがつぎの瞬間にはニヤリとしていった

「いいだろう、ただし私の授業は厳しいからな、かくごしろ。」

「は、はいー！」（あしたからがんばるぞー！）

こうして、エヴァへの弟子入りをはたしたのだった。

ナレシオンは元神でおくりしています。

「ケケケ、オレノデバンガゼンゼンネージャネーカ、ツギハアバレテヤルゼ」

修行開始！！

エヴァのもつ別荘のなかで修行第一日目が始まった。

「よし、まず貴様はどの程度魔法が使えるのかしる必要がある。貴様の使える最強の呪文をと覚えてみる！」

（えっ、呪文つてあれかしらないんだけどな……）

「……わかりました」

杖をかまえて呪文をとなえる。

「プラクテビギナル？アールデスカット！！」

ドガブアブオーン！！！！！！

近くにあった岩がけしとんだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……おい……………」

「……なんですか……………」

「……これはなんだ……………」

「……なんでしょう……………」

「……ケケケ……………」

「……どーゆーことだ！！最弱呪文でなんで岩がけしとぶんだ！！」

「え、えーと……………」

>それはだね<

またいきなり元神の声があたまに響く。

>神だからさ<

「……なんででしょうね……………」

>おいおい無視すんな<

「多分魔力が凄まじいからだと……」

「そんな馬鹿な、貴様からそれほどの魔力はかんじられんぞ」

>ふっ、ふっそれはね<

こりずに元神がかたっている。

>あまりにも魔力がおおすぎてきづけないのさ。生き物はあまりにも強大な力を感じるとそれを感じるのをやめてしまうのさ。まあかんとんにいえば格がちがう!!<

「なぞですねー」

>お願い、無視しないで……（泣き）<

「ま、まあいいそれにしても最強呪文がこれということは魔法について学んだことはないのか？」

「はい」

普通は魔法なんて存在しないしね

「ケケケ、ハンソクテキダナ」

「なら基礎からやっていこう。あまえと私が力を合わせればせかいせいふくだってできそうだ。」

「おねがいます!!」

「よし、まずは魔力のコントロールだ。そのバカみたいにでかい炎をろうそくの火の多きさまで縮めるのだ」

「はい!!」

コントロール、コントロール…

「プラクテ…」

ドガアーン

「プラクテ…」

ズガアーン

エヴァの別荘をボロボロにしつつも修行1日目はすぎていった。

……

……

…

「オレノソンザイカンガ……」

>わたしの扱いが……<

かなりきになっている二人(?)だった。

修行2日目!! (前書き)

エバア エヴァに修正しました。
ご指摘ありがとうございます。

修行2日目！！

まる1日たって、どうにか火をロウソクの大きさまで縮めることができるようになった。

「プラクテ？ビギ？ナル？アールデスカット！！」

ポツ、火が杖先に灯る。

「よし、力のコントロールはここらでいいだろう。つぎはつかえる魔法の数をふやしていくことだ。わたしのあとにつづいてとなえてみる」

そういつて、エヴァは鉛筆を数本ゆかにたてておいた。

「ゆくぞ。プラクテ？ビギ？ナル？セーインウエルタント（倒れる）！！」

カラランッ カランッ

鉛筆がよこに倒れる

「別にこれもやくにたつものではないが魔法の基礎を学ぶにはよい呪文だ。さあ、やってみるがいい」

「はい、マスター」

魔力をコントロールして呪文を唱える

ちなみにきのうの夜からエヴァのことをマスターとよぶようになってる。

「プラクテ？ビギ？ナル？セー？インウエルタント！！」

カラランッ

今回は無事に成功した。

「ふむ、どうやら魔力のコントロールは完璧だな。これからは攻撃魔法や防御魔法など実際にやくにたつものをおしえてゆく。より覚悟をもつてのぞめ」

「はい、マスター！！」

「うむ、ところでもし魔力のコントロールなしでとなえたらどうなるんだ？」

「さあ？、じゃあやってみます。プラクテ？ビギ？ナル？セー？インウエルタントー！」

ズ、ズガガガガー

近くの山がよこだおしになった……

「……………」

「……………」

「……………すまん……………」

「……………いえ……………」

どうやら魔力のコントロールはどんなときでもしていないときけんらしい。

しかし、魔法習得の速さはそんなに遅くはないだろう。

>ふっふ、おそくないどころかその世界のだれよりもはやく魔法を習得できるぞー。なんたって神だし！<

もはやかげの存在になりはてた元神がさわいでいる。

>それよりもいまのうちから始動キーをどうするか決めたほうがいいぞ。自分にもっともしっくりくる言霊のある単語ならなんでもいいからなく

（始動キーか……）

あらたな課題をのこしつつ修行2日目が過ぎた。

修行2日目!! (後書き)

主人公の始動キー、いいものをおもいつかれた方は感想欄にのせてくれないでしょうか？おねがいします。

修行3日目

「今日から実際に戦闘時や生きていく上で役にたつものをおしえていく。もう魔力のコントロールは完璧だから1日一個といわずどんな呪文を習得してもらうぞ。それとそれを使った戦闘訓練もはじめていく。」

「ケケケ、ヒサビサノデバンダ。ヤッテ（殺って）ヤルヤッテヤル

……」

「は、はい」

（チャチャゼロが殺気だつてる。なんで〜）

なかなかでばんのなかったチャチャゼロはめちやくちややるき（殺るき）まんまんだ。

「防御の方法は基礎中の基礎。魔法使いはたいてい魔法障壁を常人展開している。軽い攻撃なら防ぐこともできるし、威力を落とすこともできるからな。さあつかってみろ。」

すうーといきをすいこみ唱えだす。

「プラクテ？ビギ？ナル

エレメンタ？アエリアーリア？ウエンテイ？スピランテース？キトー？アデウンテース？アブイニミークス？メイス？メー？デーフェンダント（大気の精よ 息づく風よ 疾く来りて 我が敵より 我を守れ） リーメス？アエリアーリス（風陣結界）！！」

ブワッ

風が体のまわりを膜のようおおっていく。

「これが魔法障壁verだ。常にこれを発動しながら魔法を使えるようにしろ。魔法障壁を展開したまま次の呪文だ、攻撃魔法でもっともよくつかわれる「魔法の射手」これができなければ話にならんからな。で、どの属性を極めたいのだ？」

「やはり、マスターと同じ氷属性がいいです。」

「そ、そうか／＼／＼」

（なんだか恥ずかしい……）
意外と純なエヴァだった。

……

…

「サギタマギカ？セリエス？グラキアーリス（魔法の射手 連弾？
氷の17矢）！！」

ズガガガガ！！！！

「よし、次！」

「サギタマギカ？セリエス？オブスクリー（魔法の射手 連弾？闇
の29矢）！！」

ドパパパ！！！！

（ふむ、やはり凄まじい。一度教えただけの魔法を次々吸収してい
っている……。これならば私の弟子としてふさわしく……いや私以上
の使い手になるかもしれん。それも魔力を抑えたじょうたいでだ。
いま勝っておかねばもう二度と勝つ機会はこなくなるかもしれないな
。）

「よし！戦闘訓練をはじめろ！！」

「ケケケ、ヤルゾーヤッテヤルゾー！！！！」

「は、はい……」

（なんでエヴァまで殺気だっているんだ……）

不穏な空気がうずまくなか、戦闘訓練（殺し合い）が幕を開いた。

修行3日目（後書き）

あー、始動キーが思いつかないー。

だれか感想欄に書き込んでくれませんかねー？

……ダメですか……

ならアンパン？シヨクパン？カレーパンとかにしちやいますよー！！
いいんですか！

……

……

…

……調子にのってコメントサイ

チートがやぶれるとき……（前書き）

今回チートキャラが負けますが決して弱いわけではありません。どんな強大な魔力をもっているにしても呪文をとえなかったら意味ないでしょう？

チートがやぶれるとき……

「それではまず最初に確認しておくぞ。私はチャチャゼロを使うかわりに魔法はお前におしえたものしかつかわないそれにお前は私に触れるだけで勝ちとする。それと魔力や気もコントロールして使え。いいな？」

「はい！」

（神からもらったチートな才能、それにマスターも教えてくれた魔法しか使わない。これは勝てる！！）

「開始だ！！」

エヴァと同時に後ろに一步下がる。

「リク？ラク？ラ？ラック？ライラック！！」

「プラクテ？ビギ？ナル！！」

同時に呪文を唱え始める。

「セプテンデキム？スピリトウス？グラキアーレス？コエウンテース？イニ」

ブオン！

チャチャゼロが剣を振るい呪文が中断される。

「ケケケ、ザンネンダッタナー」

「くそ！！」

ちょうどエヴァが詠唱をおえたようだ。

「サギタマギカ？セリエス？オブスクーリー（闇の29矢）！！」

「くっ！」

エヴァのサギタマギカを横に倒れこみ回避する。

「どうした、もう終わりか！」

「まだまだー！！」

チャチャゼロの攻撃をかわしつつ呪文詠唱を完成させようとするがチャチャゼロの攻撃をかわすだけで精一杯だ。

（このままじゃいつまでたっても勝てない。まずチャチャゼロを倒

すことに集中しよう

気で身体能力を上げ一気にチャチャゼロにけりをはなつ。

ス力

「ケケケ、アミーゼ」

チャチャゼロは簡単にけりをよけると剣をまっすぐ振り下ろしてき
た。

(ころすきか!!)

「魔法障壁全力展開！！」

風の魔法障壁で頭が落ちるのはさけられたが髪が一部切れてしまった。そうこうしているうちにエヴァは詠唱をおえてしまったようだ。

「サギタマギカ？セリエス？グラキアーリス（氷の300矢）！！」

「う、うわ」

「また回避しようとするが今度はよける方向にチャチャゼロがいる。」

「ケケケ、クタバレー！！」

さらに攻撃もしてきた。

「うっ、魔法障壁全力展開！！」

ズガガガ
ゴゴン！！！！

威力を消すことはできず、

「わあ——！！！！！」

ボロボロの布のような物体がそこに出現した。

「ハアーハッハッハッハ―！！！」

「ケケケケケケケケケケケケケケケケ！！！」

高笑いがその場にいつまでも響いた。

チートがやぶれるとき……（後書き）

最近少しずつ感想くれる人が増えてきました。

……まあ、ほとんどが書き間違いに関するものですが……。

間違いばかりですみません。

でも始動キーを考えてくれた人もいてすごくうれしかったです。

感想（始動キーも）まっています。

パートナー

「うつ、うつ、ぐす。」

> おい泣くなよ……。相手が悪かったんだよ。それに負けるのも良い経験だぞ。<

元神が慰めてくれるけどそんなことでは気持ちは晴れない。

「……僕すつごく強い力をもらったのに全然はがたたなかった……。いいところまで行けると思ったのにな……。ぐす」

> おいおい、男だろ。そんなにメソメソするな。つぎに勝てばいいじゃないか。<

「……ムリだよ……。いくら魔法を覚えたって唱えるヒマがないんじゃない……。」

> それならおまえもパートナーをミツケればいいだろうが<

「……パートナー？」

パクティオの相手のことだろうか？

> そうだ、お前にも従者がいればいいんだよ。<

確かにそれは一理ある。

「でもどうやって……」

> 恒例のあれをやればいいだが！！ウジウジしてないでさっさとやれやー！！！！<

「は、はい！」

元神の迫力におされるようにして杖を空に上げた。

ヒュゴオオオオオー！！！！！！

修行の成果だろうか、今までのが比でない勢いで杖は空にすいこまれていった。

「……………」

>……………<

「……………おちてこない……………」

>……………だな……………<

杖が落ちてくるのをじつとまっていると近くから獣の吠える声と聞いたこともない叫び声がきこえてきた。

「なんだろう!?!」

> いったみる!<

声のした方に走っていくと、そこには傷だらけになった一匹の竜と、その周りをとり囲んでいる数十匹の獣がいた。

「たすけなきゃ!」

普段だったら自然の摂理とおもい手をだしたりはしなかったが、竜を一目みたたん見捨てることはできなくなった。
なぜなら、

(滅茶苦茶かわいい!!!!!!)

その竜がまだこども、しかもウロコの色も翼のかたちもそんじょそこの竜にはとうてい及ばないほどきれいだったからである。

「よし、その竜!今いくぞー!」

> ……さっきまでぐすぐすいってたのはだれだよ……<

しかし、そこで杖がないことにきがついた。

杖がなくても魔法は使えるがコントロールはむずかしくなる。

「えーい、かまうかー!!」

サギタ?マギカ?セリエス?グラキアリス(氷の17矢)!!」

この呪文を唱えれば氷の矢17本があいてを射抜く!!

…はずだった。

しかし、杖がなくコントロールできなかった魔法の矢は一本一本がそれぞれ大魔法クラスの攻撃力をもってはなたれ、

結果、近くの森もいっしょくたにしてこおりづけになった。

「……………まあ、竜が助かったからいいや。」

ドスー!!

杖が狙ったかのように足元につきささった。

「……………ここまでくると不気味だな。」

> ……気にしたらまけた。<

杖になにかついているんじゃないかなやんでいると、

クウーーン

杖に関するゴタゴタでわすれられていた竜が弱々しくこえをあげている。

「ああ！！竜を助けなきゃ！！」

あわてて竜に近づき治療呪文をとねえる。

「プラクテ？ビギ？ナル

トウイ？グラ－テイアー？ヨウイス？グラ－テイア？シット（汝が為に、ユピテル王の恩寵あれ）クーラ（治癒）！！」
パアーーーー

光が竜のからだを包むと竜のケガはひとつ残らずなおっていた。

「よし！なおったー」

> なかなかみごとだな。 <

クウーーン！

「……なんていつてるかわからない……」

> それならわかるようにしてやるう。ホンヤクコン ヤクゝ！ <
もぐもぐもぐもぐ

クウーーンハタスケテクレテアリガトウ

「おっ、さすがホンヤ コンニヤク見事だな。」

> …… もはや のいみないな…… <

ククウーーンハオニイサン、ボクオニイサンノヤクニタチタイナ

「やくにといわれても……」

> ちょうどいい。パートナーになってもらえ。 <

「……それもそうだね。僕のパートナーになってくれるかい？」

クウウウーーンハモチロンドス！

こうして無事、パートナーを見つけることができたのでした。

オマケ：

「そういえば、きみの名前はなんていうんだい？」

クウウーハナマエハナインデス：オニイサンガツケテクダサイ

「……そうだね。……！！きめた！！」

> なんだ？ <

「君の名前はオムレッツだ!!」

クウーンゝナンダカオイシソウナナマエ、キニイリマシタ
> いや、おかしいだろゝゝ!!!<

パートナー（後書き）

この竜の名前は昨日の晩御飯からとりました。あれ、おいしーですよね。

パクティオーー!! (前書き)

……なんか他の人は評価点やお気に入り登録がめちゃくちゃいるのになんで私はこんななんだろう? (ヘタだからです)

皆さんにみすてられないようガンバりますので感想? 評価おねがいしますね。

パクティオー！！

> よし、ではパクティオをおこなうく
元神がなにやら厳かな声をだしている。

（つていうか元神のクセにどれだけ偉そうなんだろう…。ウザいな
…）

> なんだか扱いがヒドいきがするが…まあいい。オ、オムレツ顔を
こちらに向けよ。<

オムレツがこちらを向く。

ちなみに今は元神の声はオムレツにもきこえるようになっている。

> 次に互いに血を魔法陣にたらせ。<

事前に元神にいわれ書いてあつた魔法陣に血をたらす。

パタパタ

ドバドバ！！

…… なんだかオムレツの周りが凄いいことになっている。

> …… ここに血の契約を結ぶ。パクティオー！！！！<

パアー

突然あたりが明るくなったかとおもつとめのまえにパクティオカー
ドがあらわれた。

なんだか説明書のようなものもついている。

「どれどれ」

へパクティオおめでとう！！

私はパクティオを司どる神です。

ぜんぜん仕事しない元最高神のかわりにあなたがはいつてくれてと
てもうれしくおもいます。

あなたの従者オムレツにあたえられたアーティファクトは「カミガ
ミノペット」

能力は自分でたしかめてください。

このアーティファクトがあなたのたすけとなりますように。

・愛の神アフロディテより

追伸、私の加護があるから血を使う必要はありませんよ。手を握ってパクティオと言っただけでいいですからね。」

「……………」

>……………<

ボタボタボタ

「…………… クーラ（治療）」

シューウー

キュイー「ハアリガトウ、オニイサン。デモコレデケイヤクデキタネ」

「…そうだな。いったいどんなアーティファクトなんだ？」

>こればかりはやってみないとなく

キュユイー「ハアデアット（来れ）！！」

シューワー

オムレツの首が光ったかとおもうとオムレツの首に首輪がついていた。

「……………これが「カミガミノペット」なのか？」

>だろうなく

別段オムレツが強くなったようなきはしない。

「オムレツなにかかったことはあるか？」

クウー「ハトクニナントモ……………」

「……………まあ、そんなにきにするな。今はお前がパートナーになってくれたことで十分だよ」

キュウウー「ハオニイサン（ジーン）ボクガンバツテオニイサンノヤクニタツヨ。……………デモ、ボクガリュウジャンクテ、ユニコーントカダツタラ、コマワリガキイテ、モットオニイサンノヤクニタテタノニ……………」

そうオムレツがいったとたん。

キュウウウ

首輪がひかり、オムレツが姿をかえた。

まず翼がひっこみ、角が真ん中でひとつになりねじれる。あしはうまのようなかたちにかわっていく。光がきえるとそこには一匹のユニコーンがたっていた。

メヒ、メヒヒヒーン！！「ウワ、ユニコーンニナツテル！！」

声までユニコーンのそれだ。

「どうなっているんだ？」

そうつぶやくと

パサ

かみがひらひらとまいおりた

「なんだろう？」

「カミガミノペット」の能力はありとあらゆる神獣、幻獣、動物に変身することができ、その動物の能力を使用することもできる超すぐれものです。お役だてください」

ためしにとオムレツが変身する。

メヒメヒヒ！「人間に変身！」

キュア

また、オムレツの体が変形をはじめ。

「ふー、人間になれたようですね。」

そこにあらわれたのはマッパダカの少女だった。

パクティオーー！！（後書き）

オムレツはじつはメスおちです。最初はオムレツ、オスでしたが、変身したときによとオスじゃまずいだろうとおもいメスにしました。メスだからいいっていうものでもないですが、オスよりいいでしょう？

リベンジ（前書き）

今回は戦闘シーンがありますが文才がないため非常にチャチです。
ご容赦を。

リベンジ

オムレッツがメスだとわかり、ひとそうどうあったが多くはかたらない。

ただ、元神が鼻血を噴出する音だけは今でも耳にのこっている。

> ち、ちが、あれは鼻血ではなくて<

そんなことはどうでもいい。

> ひど！<

今重要なのは僕にパートナーができたこと。

パートナーさえいればマスターにかてるかもしれない。

パートナーができた今、僕がするべきことは魔法を覚えることだけ。こうして修行4日目が始まった。

ちなみにオムレッツはネズミになってそこらの草むらにかくれてもらっている。

やってやるぞー！

気合いをこめてマスターのところに行く。

「ふむ、なにやら今日はやけにやる気まんまんだな」

さすがマスター、まさかきづくとはね。

「いえいえ、そんなことないですよ」

まだオムレッツのことをばらすわけにはいかない。

「まあいい、でははじめろぞ」

気合いをいれてやったせいか今日はいつもよりたくさんの呪文をおぼえることができた。

くわしく言つと、「雷の暴風」クラスと「千の雷」クラスを全属性、さらには「闇の魔法（マギア？エレベア）」など、マスターの知っているありとあらゆる魔法などだ。

「……………もはや教える魔法はないな……………」

魔法の修行が完成したのになんだかマスターはうれしくなさそうだ。「オイ、ゴシユジン。シユギヨウガオワッタナラハヤクコロソウゼ」

「……そうだな、今は私も同じ気持ちだ。私が長年、苦勞に苦勞をかさねて到達した領域にたった4日でたどりつくとはな……」

「……さあ、次は虐さ、じゃなくて戦闘訓練だ。さあはじめるぞ」
「ケケケケケ、クロスクロスクロス……」

「はい。ではマスター」

「なんだ？」

「僕もパートナーをよんでよいでしょうか？」

「パートナーだと……。ふん、だれだろうとすきにつかうがいい」
「はい。オムレッツ!!」

ガサガサツと音をたててオムレッツが草むらからとびだしてきた。

「……そのネズミがお前のパートナーだと。……私を侮辱しおつて
クロス!!!!」

「うわ!!」

いきなりチャチャゼロがきりかかってきた。

カキン!!

それをユニコーンに変身したオムレッツが受け止める。

「なっ、ユニコーンだと!……なるほど、そのオムレッツとやらが何者かはわからんがその変身能力がそやつのアーティファクトだな。
チャチャゼロ!そいつはまかせたぞ!」

「リョウカイ」

流石に長年生きてきただけのことはある。

驚いてもすきは全然できていない。

なら、真っ向から力比べでかってやる。

「オムレッツ!そっちはまかせたよ!」

チャチャゼロをオムレッツに任せて僕は呪文をえいしようする。

「プラクテ?ビギナル

オー?タルタローイ?ケイメノン?バシレイオン?ネクローン?ホ
?モノリートス?キオーントウ?ハイドウ(おお地の底に眠る死者
の宮殿よ、我らの下に姿を現せ。「冥府の石柱」)!!」

巨大な石の柱がエヴァ目掛けておちる。

「くっ、「断罪の剣」！！」

冥府の石柱がまっぴたつにされた。

（さすがはマスター。でもつぎはどうか）

「プラクテ？ビギナル

ト？シュンボライオン？デアコネート？モイ？バシレウ？ウー
ラニオーノーン

エピゲネーテートー？アィタルース？ケラウネ？ホス？ティテーナ
ス？フティレイン

ヘカトンタキス？カイ？キーリアキス？アストラプサトー キーリ
ブル？アストラペー

（契約に従い、我に従え、高殿の王。来たれ、巨神を滅ぼす燃えた
つらいえん。百重千重と重なりて、走れよ稻妻「千の雷」）！！コ
ンプレクシオー（掌握）！！

術式兵装「雷天大壮」！！」

これは完全なるネギのパクリだけどまだネギは生まれていない、発
案者は僕になるだろう。

「雷速瞬動！！」

雷の速さでエヴァに突っ込む。

チハヤブルイカスチ

「千盤破雷！！」

ガガガガガ

あたりがけしとぶがエヴァの姿はない。

「ふっ、その威力は流石だがまだまだつめが甘い小僧！！」

どうやら影のゲートで転移してよけたようだ。

「くらうがいい。

ゼロ距離「闇の吹雪」！！」

背中に手を当ててはなされた「闇の吹雪」

「そんなもの「気合い防御」！！」

大量の気でエヴァの魔法をはじきとばす。

さらに、

「解放「永遠の氷河」！」

ためていおいた「永遠の氷河」がエヴァを氷づけにした。
キュウーーーーー！！

オムレツの方を見るとチャチャゼロがボロボロになっている。

オムレツは大きな鳥、おそらくはシンドバッドの冒険に出てくる怪鳥になっている。

いったいなにがあつたのだろうか。

でも、いまはそんなことより。

「勝った~~~~~!!!!!!」

リベンジ（後書き）

かなり後になりますがネギ達ともからめます。

そこでこの小説の路線を決めてほしいです。

具体的にいうとネギの成長を助けながらともに生きるver
もしくはネギを完全否定し自分がハーレム状態ver

どちらがいいかということです。

ネギ肯定なら1

否定なら2

と感想欄にいらしてください。

ついでに始動キー案や感想ものせてくれるとうれしいです。

バクティオマスター

「ハーハッハッハ」

負けたというのにエヴァはなんだかうれしそうだ。

「わたしが何十年もの歳月をかけて到達した域にここまで早くたどりつかれるとはな。

ここまでくるといっすすがすがしいものだ。」

そういつてクククツと笑い続けている。

「オマエモナカナカヤルジャネエカ、オムレットカイツタカ」

チャチャゼロは久々に全力をだせたようですっきりした顔をしている。

「ありがとう。でもつかれた〜」

オムレッツは今、人verだ。

「そうそう、ききたかったんだが、

このオムレッツというやつは何者なんだ？

最初はネズミだったし、途中では馬にもなっていた。

そして、今は人間だ。」

エヴァがいぶかしげにきいてくる。

「じゃあ、オムレッツ。変身というて。」

「はい。アベアット（去れ）！」「
しゅー」

オムレッツの変身が解け、元の竜の姿にもどった。

「なっ……！！竜だと！しかもこいつは古龍！」

古龍？それってたしか「真祖の吸血鬼」とおなじく最強種の竜だったはず……。

どうりでチャチャゼロと互角に戦えたわけだ。

一人納得しているとエヴァはさらに聞いてきた。

「古龍に変身能力はない。ということはアーティファクトの力か。」
「うん。」

エヴァの言葉に頷いてアーティファクトカードをみせる。

「なるほどな……。ん？」

「どうしたの？」

「いや、マスターの名前がアーティファクトカードにかかれていない。どういうことだ？」

「さあ？」

>ふふ、それはだね。<

元神の解説文が始まる。

>君が神になった時から君の名前はなくなっただ。

新しい神の名前は友達、この場合はエヴァにきめてもらえ。<

「……えと、今僕名前がないんです。」

マスターが決めてくれませんか？」

「なっ、名前がない？」

それに私にきめるとは……」

「だめですか？」

「い、いやべつにかまわないぞ。」

「ジエイソントカフレディツテノハドウダ？」

「絶対やだ!!」

なんて恐ろしい事をいうんだこの人形は。

>あ、あとパクティオしてもらえ。アーティファクトはあったほうがいいくなるほどな。

「マスター！パクティオしてください!!」

「い、いきなりなにをいうんだ。…まあ、してやってもいいがな…。」

「ケケケ、ゴシュジン。パクティオハキスデヤツテヤレヨ」

ドカ、バギ、グシヤ

「ス、スマナイ。モイウワネエヨ」

ガク

チャチャゼロが崩れ落ちた。

「ふー。」

(>……この人(?)にさからってはいけない……<)
神達のところがひとつになった瞬間だった。

「よ、よし。」

先程の鬼の様子と一変して恥ずかしそうに呟く。

「……お前の名前はウエティスだ。」

この私が名付けてやったんだ。ありがたく思え。」
ウエティスカ…

「ありがとう。マスター」

「ウエティス、いい名前だと思いますよ。」

オムレツも尻尾をふっている。

「それじゃあマスター。パクティオを。」

「ああ。それでは血を…」

「あつ、手を握ってパクティオー！って言うだけでいいよ。」

「……ずいぶんとお手軽だな。」

世の中そんなものである。

「はい、それじゃあ。」

「うむ。」

「「パクティオーー！！！」」

ピカー

光がきえるとパクティオカードがあらわれた。

どれどれ、どんなアーティファクトかな。

カードにはアーティファクト「パクティオマスター」とかかかれてある。

「アデアット（来れ）！！」
ピカ

カードが光るとそこには一冊の本が現れた。

「いったいどんな力をもったアーティファクトなんだ？」

エヴァがきいてくるがこっちがしりたいくらいだ。

とりあえず１ページめくってみる。

するとそこには説明文がかいてあった。

「えーと、なににな」

「このアーティファクト、「パクティオマスター」は多数のアーティファクトを内包できるスーパーアーティファクトです。」

具体的に言つと一度契約した相手がこの本の1ページに描かれます。描かれた相手のかずだけアーティファクトが使えるようになります。

使いたいページを開いて再度、アデアットと唱えればそのページにしるされたアーティファクトがあらわれます。

そのアーティファクトは特別で相手のもっているアーティファクトとはことなります。

例：Aさんと契約しました。Aさんのアーティファクトはaです。しかしAさんと契約したあなたはbというアーティファクトを得ます。

つまり、これは契約した数だけ得をするアーティファクトというわけです。

じゃんじゃん契約してくださいね〜

パクティオマスター（後書き）

主人公の名前は始動キー案からとらせていただきました。
ありがとうございます。

今回の説明文わかりづらいでしょうか？

今回も1か2か選んでください。

感想&1or2お願いします。

旅立ち（前書き）

今回も短いです。

旅立ち

……沈黙があたりを覆う。

「……いったいなんなのだ。このアーティファクトは？」
そんなのこつちがききたいくらいだ。

「ケケケ、ツカツテミリヤハツキリスルダロ」

……たしかにそうだ。

1ページめくつてみると左にオムレツのえが、右にエヴァのえがかかれていてその下になにやら文字がかかっている。

「ボクとエヴァは契約したからかかれてるわけか。じゃあ新しいアーティファクトが使えるんだね」

「そういうことになるな……。よしつかってみる」

「うん、わかった」

手始めにオムレツのほうでやってみよう。

「アデアット！」

ピカ！

オムレツのページが光り腕環と紙が現れた。

えーとなになに、紙にはまたまた説明文がかかっていた。

「このアーティファクトは獣化の腕環をみにつけるとありとあらゆる獣の力が付与されます。獣化することも可能です。」

えーと、どうやらオムレツのアーティファクトとにているけど更に性能が高いみたいだな。

これなら変身しなくても獣の力を使うことができる。

「ほう、なかなか面白いな。契約すればするほどいいというわけか……。次は私のをつかってみる。」

もちろんだ。いったいどんなのがでてくるんだろうか。

ワクワクワクワク

「アデアット！」

ピカー！

またもやページがひかり、今度はマントが現れた。
もちろん紙つき。

「わ、わたしにさきにみせろ！」

説明を読もうとしたらさきにエヴァにとられた。
もしもしよぼかったらプライドがズタズタになるからだろう。

「……………なにー!!」

説明を読んでいたエヴァがいきなりさげんだ。

「いったいどうしたの？」

「あ、ああ。今読むからきいてくれ。

「このアーティファクト＞真祖のマント＜は隠密行動や敵を封じ込めることができさらには盾としてもつかえます。

具体的にいうと重力、魔力、精霊力、気配、気、その他もろもろのすべてを遮断できます。

このマントを身につけていれば戦場で昼寝すらできます。」以上だ。

この凄まじさがわかるか？」

「……………なんとなく。」

「ふっ、まあいい。

だがさすが私と契約して得たアーティファクトなだけはあるな。

ハハハハハハ」

「ウレシソウダナゴシユジン」

エヴァのプライドはどうやらまもられたようだ。

「ところでお前これからどうするんだ？」

「えーっと、実は会いたい人達がいて。」

「…そうか。ずいぶん短い付き合いだったがお前達のこととはきらいではなかったぞ。また会おう。」

「…うん」

こうしてエヴァのもとを離れ、赤い髪のチート野郎達に会うために
ぼくらは旅立った。

出会い（前書き）

送って頂いた始動キー案をやっといかせます。
ありがとうございました。

出会い

さーてナギ達をさがそうか。

>どうする……ってあれか…<

そのとおり。

「それ」

ヒュッゴー……!!

杖が空へとぼっていく。

「さーて、オムレツ。ナギ達に会う前に変身してくれないかい」

「なににですか」

「ケルベロス」

あの頭が三つある犬だ。

>なんでケルベロスなんだ？<

「なんか悪役的登場がしたくって」

マスターにあてられたのかもしれないがなんか悪役的登場をしてみたいんだ。

……んっ、なんか声がきこえてくる…。

「へっへ。久しぶりの焼き肉だぜ」

「こら！ナギ！まずは野菜からいれるんだ！」

「ふっふ、あなたのような人は古来より焼き肉將軍と

「よばれん！」

「おいおい、そんなことどうでもいいだろ早く食おうぜ」

「うむ、くうのじゃ！」

「……………」

うわー、いきなり「紅き翼」発見。

ナギに詠春、アルにラカンそれにゼクトもいる。

「……いただきまーす!!」「……」
ズカン!!

焼き肉に杖がささり吹き飛んだ。

どうしよう……

「や、焼き肉がー」

「おのれー食い物を粗末にしおつて!」

「……こんなことがまえにもあつたようなきが……」

「だれだ!こんなバカなことをするやつは!」

「……おぬしもやったじやろう」

「紅き翼」の面々がきれている。

(よし、ここだ!)

ケルベロス(オムレツ)にまたがり姿を表す。

「ハーハッハッハ!

紅き翼よそのていどの攻撃もふせげないとはな!」

うそです、わざとじゃありません。

「おのれー!」

詠春が刀を構え突っ込んでくる。

「神鳴流奥義!斬岩剣!」

おいおいころすきか、

「オムレツ!」

「はい!」

ガキーン!

オムレツがユニコーンになり斬撃をはじきかえす。

「なっ!」

あいてが驚いているすきに呪文を詠唱する。

「ウエティス?ウエテック?ウ?エ?テック」

ちなみにこれが僕の始動キー

「ウエニアント?スピリトウス?テレステレース?フローレンター

ス?クム?フローレ?ソムニアリー?スプ?カエロー?ベルクラッ

ト?ウーナ?テンペスタース(来れ地の精 花の精!! 夢誘う花

纏いて蒼空の下 駆け抜けよ 一陣の嵐！！）

ウェーリス？テンペスターズ？フローレンス（春の嵐！！）

スタグネット（術式固定！！！！）

コンプレクシオー（掌握！！）

スプレーメントウム？プロ（魔力充楨）

アルマテイオーネム（術式兵装）

「一場春夢」！！」

これは「春の嵐」を闇の魔法でとりこんだ技、もともと春の嵐は人数用催眠呪文。

それを取りこむことにより強力な幻術を常時発動することができる。それが「一場春夢」いちじょうしゅんむく」だ。

……詠春にはこれだな。

えい！

「うわ！なんだ！いきなり女がたくさん出てきた！」
はっはっはどうだ

「ふん、私も甘くみられたものだな。こんな手がなんとも通用するわけ……」

ガク！

詠春が鼻血をだしてたおれた。

よし一人目。

「ハッハッハ、どうしたもうおわりか？」

ここですかさず悪者ボイス。

「へっ、みんな手出すなよ！」

「なにいつてやがるあいつはオレにやらせな」

案の定チート& amp; バグの二人がのってきた。

「オムレッツ！そっちの筋肉ダルマはまかせたぞ」

まずはナギたたかってみたいからね。

「ガワアー（了解）！！」

竜の姿に戻りオムレッツがこたえる。

「……いざ！（ガワアー）」「……」

神と竜と二人の人間の影が交錯した。

出会い（後書き）

更新遅れてすみません。

次回の更新は来週末ごろになるとおもいます。

再来週からは3日に一回くらいで更新していきたいとおもいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7555j/>

神様になれ!!

2010年10月8日22時43分発行